

仙台の野山

教授 高槻成紀

私は昭和44年に東北大学に入学し、初めて東北地方に来た。仙台という地名は聞いていたが、宮城県にあるということをはっきり意識したことはなかった。自分が東北地方で暮らすことになるなど考えてもいなかったからだ。春なのに寒いのに驚いた。4月なのに緑がなく、地面が冷たかった。十代の私はそうした故郷とは違うことに違和感を感じるのではなく、自分が知らないところで生活を始めることをうれしいと感じていた。受験勉強はずいぶんしたから、そのあいだに蓄積していた「読みたい本を読める」という強い思いが爆発するようで、大学生協で「アユの話」とか「ゴリラとピグミーの森」などの岩波新書を買って、「さあ、これからは好きな生物学の本をたくさん読むんだ」と意気込んでいた。

友人ができるまでは大きな教室での授業には孤独感があった。漢文などは話のうまい先生がいておもしろいと思ったが、期待していた生物学は退屈だった。5月の連休の頃になると、仙台には一気に春が訪れ、新緑が一気に山を被う。私は土日は必ず近くの山に行った。5万分の1の地図をながめて良さそうなルートを見つけ、仙台と山形を結ぶ仙山線というローカル線で降りて山を歩いた。図鑑であこがれていたクジャクチョウが道ばたにいたりして驚いた。スマレの名前を調べるのは楽しかった。

春は一気に訪れたが、去るのもまた早かった。1週間後にはもう春が行き過ぎるようだった。週末だけしか山に行かないでいたら、植物や蝶を見るのに1年待たないといけないかもしれない。私は大き

な抵抗をかかえながら、授業をさぼろうかと思えばぐね、最終的には決行した。日記に「〇〇先生すみません」と書いたのを覚えている。

一度さぼればあとは罪悪感が薄れていた。自分には「こっちのほうが強くなるんだ」といいきかせて自己正当をしていた。仙台の近郊の野山についてはかなり歩き回って土地勘もできた。

最近、新聞の広告で気になる本が出版されたことを知り、手に入れて読んだ。今から10年前に発覚した石器遺跡の捏造事件の本である。事件が発覚してすぐにいくつかの本が出たので、だいたいのことは知っていたが、この本は一連の発掘を実質的に支援していた文化庁の担当者によるものであったから、特別の意味をもっていた。この著者は犯人との共犯者であると疑われたこともあるという。

犯人である藤村真一という男は石器を発見する確率が高いために「神の手」といわれていた。私は「アエラ」という雑誌にその「神の手」のすばらしさを讃えた記事を読み、その翌日に事件が発覚したので、その偶然に驚いたことを思い出した。その本の中の内容を読んでいて、もうひとつ思い出したことがあった。当時私は植物生態学の研究室にいたが、仲間には地形学を学ぶ人もいた。そうした仲間と酒を飲んでいたときに、「考古学者というものはすごいもんだよ。仙台で拾った旧石器の石の割れた片割れを山形で見つけたんだって」と聞いた。

「それは作り話だな」

生意気で通っていた私は、先輩であろうが先生（といっても教授は雲の上の人で、話し相手にできたのは助手だった人）であろうが、納得できないことは批判した。考えてもみよう。いくら専門家であっても、ひとつの石が割れて同じ川原の1メートル離れたところにあってもそれがペアであると言い当てることはできないだろう。それが10の4乗年という古い時代に30キロも離れたところにあったものがどうして見つかるなどということがあろうか。その「奇跡的発見」も藤村の「神の手」による捏造であった。

藤村と私は歳がほとんど同じだ。思えば私が授業をさぼって歩いていた野山を、藤村も純粋に石器を探して歩いていたのだ。彼は私以上によく歩いていたようで、その経験を通してどういうところに行けば石器が見つかる確立が高いかを会得していたようだ。

解説によれば、自己顕示欲が強すぎる人は、人を驚かせたいがために虚言を吐いたり、事実を捏造したりして、自分でもそれが偽りなのかどうかわからなくなるのだという。藤村にしても、本当の小さな発見があり、それを周囲が讃えたときの快感のようなものがあつたのであろう。そうしたことがもともとあつた自己顕示欲に結びついたのであろう。

幸か不幸か、私は人を驚かせるような発見はできなかったし、そうしたいという欲望も小さかった。私がしたのはただ自然はこうなっているということを知るために動植物を採集して名前を調べ、なぜそこにいるかということを考えたり、生き物持つ形や色や生理がいかにかまかまかできているかを確認してきただけである。ただ学生時代には私も藤村も同じように自然の中から関心のあるものを見たくて

同じように野山を歩いていたのだ。胸の中にはほぼ同じ思いがあつたのかもしれない。

その後大きく違ってしまつたのだが、しかし私が思うのは、私たちがこうした異常ともいえる人とまったく違うとはいひ切れぬということである。人には多少とも自己顕示欲はあるし、研究者であれば論文を書きたいという欲求は強くある。自分が自然のことを知りたいという純粋な知的好奇心が、こうした欲求に負ける危険はつねにあるといえる。生態学には実験室の実験とは違って、まったく同じ条件での追試ができないところがある。それだけに、捏造誘惑の危険は他の生物学分野よりも大きいといえる。

なんとも痛ましかつたのは、病院にいる藤村を著者が訪問したときの記述だ。あれだけの重大な捏造をしていながら、それを問うと、何も覚えていないと答えたというのだ。そのあたりのようすは文章からはわからないが、嘘とは思えないような気がした。あまりにも大きなトラウマは思い出したくないことに蓋をするといった心理があるのかもしれない。あるいは思い出したくないという気持ちが、異様な心理の中で覚えていないというほうが楽だというふうに意識が働き、本当に覚えていないと信じ込むというようなことがあるのかもしれない。著者自身、自分は犠牲者であり、学問そのものを裏切つた男に対して甘いといわれるかもしれないが、それ以上追求する気が起きなかつたと書いている。そうなのだと思う。

最もショックだつたのは、藤村がああいうことを二度としないようにと斧で自分の指を切断していたということだつた。悲痛の極みである。藤村というひとりの

男もまた人のもつ弱さの犠牲者なのだと　　いう気がした。

岡村道雄. 2010. 「旧跡遺跡捏造事件」, 山川出版社.